

対母語話者の repair と対外国人話者の repair との 比較分析 —電話での問い合わせの会話を中心に—

永山 友子

キーワード： repair、聞き返し、くり返し、言い換え、ターン取り

1.はじめに

現代社会において、日本語習得過程にある外国人話者と日本人が接触する機会は多くなりつつある。そのようなとき、日本人話者は日本人同士の場合と同じような言語行動を取るのだろうか。それとも、話者の言語行動には、相違が見られるのであろうか。

本稿では、Freed (1981)に倣い、母語話者同士の会話を、ネイティブ・トークと呼ぶ。そして、ネイティブ・トーク（以下、NT）とフォーリナー・トーク（以下、FT）(Ferguson, 1981)を比較検討するに際し、それぞれに見られる repair 行為に注目していく。

2. repair とは

repair には、「修正」という訳語が与えられている（『ロングマン応用言語学用語辞典』）。けれども、伊藤(1991)も述べているように、repair とは、「間違った発話を訂正する“correction”も当然含むものであるが、相手とのコミュニケーションを円滑に行い、誤解のないように意志の疎通を図るための、訂正・言い換え・言い直し・補足といった広範の発話行為」であり、必ずしも「訂正」を意味しない。それゆえ、本稿では、「修正」という用語を使わず、repair という原語を用いる。

話者と聞き手の間の相互作用としての枠組みから、repair を検討する研究(Schegloff, et al., 1977)もある。発話行為としての repair は、話者自身によって始められるのか・聞き手が始めるのか、自分自身が実行するのか・相手によって実行されるのかという 2つの尺度によって分類することができる。

3.理論的背景

3.1.Canale and Swain(1980)のコミュニケーション能力のモデル

Canale and Swain(1980)では、コミュニケーション能力の3つの構成要素が提案されている。コミュニケーション能力は、文法体系に関する知識、社会文化的ルール及び談話構成のルールに関する知識、そして、方略に関する知識(ストラテジー能力)から構成される。このモデルは、第二言語能力を念頭に置いているが、第一言語能力にも適用できる。実際には、コミュニケーション能力がこのようにきれいに整理されるとは思われないが、大まかな枠組みとしては妥当であろう。

そして、repair 行為は、ストラテジー能力の一部をなすと考えられる。相互作用としての repair には、談話構成ルール(Schegloff et al., 1977)も適用されるため、社会言語能力の関わる側面も少なくない。けれども、本稿は、コミュニケーション・ストラテジー(以下、CommS)の観点から repair を捉えるという立場¹を取りたい。

3.2.コミュニケーション・ストラテジー

「コミュニケーション・ストラテジー」は、なかなか定義が安定しない用語のうちの1つでもある。Bialystok(1990)は、次のように記述する。

「第一言語において、ある考えから次の考えへと話者が移行する際の容易さや流暢さは、第二言語で話すとき、第二言語に関する何らかの知識のギャップによって、常に寸断されてしまう。知識のギャップは、単語・文構造・言い回し・時制の標識・イディオム等にかかわってくることもある。このような知識のギャップを克服するための試みが、コミュニケーション・ストラテジーと呼ばれている。」

外国人話者による repair は、限りのある自分の言語資源 language resources を十二分に活かすための CommS である。しかし、ことばに関する「何らかの知識のギャップ」は、第一言語での言語活動にも十分起こりうる。適切、又は適当な表現が思い浮かばなかったり、自分の口にした表現が聞き手に情報を伝えきれなかったという経験を持つ人は多いのではないだろうか。そのような場合に、母語話者による repair が観察される。

repair は、外国人話者による CommS であると同時に、母語話者にとっても、意志の疎通の破綻 communication breakdown を修復するための方略となるのである。

3.3. 「ことばの簡略化」

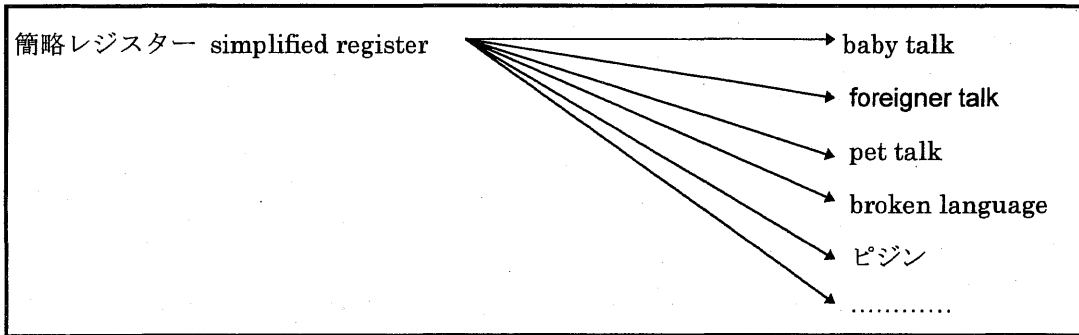


図1 簡略レジスターの分類

言語行動を論じる際の「簡略」という概念も、明白なようでありながら、定義するのは容易でない。どのような現象を指して「簡略」と言うのかについては、さまざまな議論がある。例えば、Yano, Long and Ross (1994)には、簡略化と言語理解についての考察がある。簡略化へのアプローチは、言語形式の変更 *linguistic modification* と、詳細化 *elaborative modification* との2つに大別される。前者は、使用語彙の限定、短い文、単文などの特徴からなる。後者は、自分と相手とのやり取りの観点からの簡略化で、言語形式の調整 *linguistic adjustment* と会話の調整 *conversational adjustment* とに分類できる。言語形式の調整は言語の形式的な側面と関連し、会話の調整は、会話の内容と話者と聞き手の関わり方 *interactional structure* に関するものである。会話の調整の場合には、簡略化というよりも、発話の詳細化が行われる。また、会話の調整は、言語形式の調整を伴う場合も、伴わない場合もある。*repair* は、会話の調整の一種として考えることができる。

第二言語運用能力が十分でない外国人話者に対する FT も、簡略レジスター *simplified register* の一種として位置付けられる (Freed, 1984)。「フォーリナー・トーク」という用語は、Ferguson(1971)によって提案された。次いで、Ferguson(1981)は、FT は、主に外国人、すなわち、話し手の言語の十分な母語話者能力をもたない (又は、全く能力をもたない) 人々に話しかけるときに用いられるレジスターであると説明する。

FT のもつ簡略性には、喩えるなら諸刃の剣のような効果があるとされている。社会言語学的な観点からは、Valdman(1981)が、FT には、外国人とのコミュニケーションの容易化を図る反面、話し相手をコミュニティの成員として認知せず、自分より下とみなす側面²もあると述べている。その一方で、Long(1983)は、心理言語学的な立場を取り、外国人学習者へのインプットとしての FT の機能や第二言語獲得への促進効果に触れている。

4. 調査の概要

4.1. 予想

公的、又はやや公的な施設において、一般からの問い合わせへの応答とは仕事の一部分であろう。従って、情報を求められる案内係には、質問に答える動機が十分あると思われる。しかし、電話での会話では、非言語行動等のパラ言語的な要素や、話者や聞き手の外見による効果が期待できない。これらの要因の影響が取り除かれた状況では、言語行動にかかる比重が大きくなり、互いの理解を補足するための repair 行為が増えるのではないかと予想される。

このような考察を踏まえて、互いに見知らぬ者同士が、電話を通して情報のやり取りを試みる（正確には、片方がもう片方から情報を得ようとする）状況を設定した。

コミュニケーションをなそうとする動機は十分であるものの、制限を受けた状況での情報授受は、コミュニケーションの破綻を引き起こし、破綻の修復である repair の頻度を高くすると予想される。そして、母語話者への対応よりも、外国人話者への対応の方がより多くの支障をきたし、破綻の修復もより頻繁に観察されるという仮説を立てる。破綻修復である repair は、外国人話者に対してなされる「会話の調整」の一種でもあるからである。

4.2. データ

17歳から76歳の横浜在住の日本人母語話者15名（平均年齢38.2歳）、並びに19歳から42歳の外国人話者26名（平均年齢27.7歳）に、公共施設への問い合わせの電話をかけてもらい、対応相手とのやり取りを留守番電話に付属している会話録音機能、又はピックアップアダプターとテープレコーダーを用いて録音した。日本人協力者の職業は、会社員、主婦、教諭、学生であった。母語話者には、言語学の知識は特になく、外国人話者の日本語学習歴の平均は28.2月、日本滞在期間の平均は20.2月であった。幼少の頃から家庭で日本語に触れていたという日系ブラジル人が1名いたが、日本語学習歴はこの人を除いて計算した。外国人話者は、筑波大学の留学生24名、東京都内の専門学校留学生2名である。彼らの専攻は、人文科学、社会科学、工学の分野に渡り、日本語教育を専攻とする留学生が、1名含まれていた。録音時期は、1994年8月から12月である。

協力者には、「問い合わせへの対応」に関する調査への協力依頼をし、5つの大まかな質問項目（その施設への行き方、所要時間、利用できる時間、入園料、休館日）を提示した（本稿末尾の付録参照）。問い合わせを受ける側の対応を調べるのが目的であると説明し、協力者が特に興味をもっていることがあれば、そちらを優先してもらった。問い合わせ先のリス

トは、分析者により提示されたが、リストに載っていないところも、協力者の判断で問い合わせ先になっている。repair が分析対象であることは、伏せた。真の意味での自発的な問い合わせではなく、通話は録音されるため、内容について関心をもってくれない可能性があったので、聞き取った内容については、簡単なものでよいからメモを取ってくれるように頼んだ。協力者には、質問を 5 つ記した用紙³を依頼状に添えて渡した。15 名の日本人協力者のうちの 12 名、26 名の外国人協力者のうちの 13 名から、メモを回収することができた。

概観したところ、協力者はほとんどみなまじめな態度で電話をしてくれたと判断できた。調査協力への承諾を得た時点で、情報を求める動機は生まれたと言ってよいであろう。なお、今回の調査では、問い合わせ窓口側の人物（全員が、日本人母語話者であった）について、声から性別は識別できるものの、方法論上、年齢は不明である。

録音された会話は、原則として漢字かな交じり表記を用いて文字化した。ただし、語の一部が長音として発音されている場合には、漢字表記が通常である語であっても、敢えてひらがなで表記した。また、比較的ゆっくりと発音されている場合は、中黒を挿入してある。括弧の部分は、分析者がはっきりと聞き取れなかった箇所である。はっきりとは聞き取れないが、見当は付けられる場合には、発話されているのであろう言語形式を、括弧の中に記した。開き括弧記号と閉じ括弧記号のみが並列されている箇所は、発話形式の見当さえも付けることができなかつた部分である。発話部分の重なりは、ダブルスラッシュ（／／）で示し、ほぼ同時に始まっているところは、その位置を合わせた。発話部分のくり返しには、下線を引いた。二重下線の引かれている部分では、言い換えがなされている。相手による repair を促していると思われる発話は、波線で示した。発話が上昇調で終わっている場合には、疑問符を付け、平板調・下降調には読点を付けた。句点と読点との区別はしていない。電話口での応対に出てきた施設側の人を「施」とし、問い合わせをしている協力者は、姓のイニシャルで示す。発話番号は、全体の通し番号で付けた。発話中、複数の漢字の読み方が可能である箇所には、該当する読みがなを鉤括弧で記した。

4.3.分析

収集されたデータに現れた repair を、伊藤(1991)によって指摘された「くり返し」や「言い換え」と、相手からの要求（問いかけ）の有無という 3 つの角度から検討する。

4.3.1.くり返し

対話における反復には、相手の発話をくり返す場合と、先行する自分の発話をくり返す場

合とがある。相手の発話をくり返している場合でも、その相手の発話が、実はそれに先立つ自分自身の発話のくり返しになるという連鎖構造も見られる。

くり返しは、repair を自分で実行するためにも、相手に要求するためにも、有効な手段となる。自分も相手もくり返すことで、聞き取った内容が正確なのか否かの判断ができる。その反面、少なくとも部分的には、相手の言ったことを聞き取れないと相手の発話のくり返しはできなくなる。だからこそ、くり返しは理解確認の尺度として機能し得る。

部分的にしか聞き取れなかったときは、聞き取れた部分をなぞりつつ、わからなかったところを相手に問いかけることになる。問いかけられた側は、当該箇所を最初から全部くり返すか、問いかける側の発話を引き取って補足する。データ(1)(2)の案内係は、相手の聞き取りが的確でないため、くり返して発話し、エラーの訂正を試みる。データ(1)のTは、「がいえん」が「外苑」であることをわかっていなかった。Tによるくり返しには「外苑」という語が含まれていない。案内係は、そのことに気付いたらしく、「外苑」の説明を始める。なお、「がいえん」の漢字表記が、引用部分の後で問われていた。

(1) (日本人女性Tが日本庭園と)

64 施：お入りいただけますのがー、

65 T：はい、

66 施：外苑が4時半まで、

67 T：／／え？

68 施：　　な、外苑が4時半まで、内苑が4時までです、

69 T：(間) よ、(間) あ、4時まで／／ですね？

70 施：　　えー、

71 T：えー、

(間)

72：4時まで、受け付けるわけ／／ですね？

73 施：　　そうです、そうです、

74 T：はい、

75 施：はい、

(間)

76 T：そうしますと、(間) えー、入園料は、どのぐらいでしょうか、

77 施：はい、えーと、まずお入りいただきましたところが、外苑というところ
ですー、

(2) (中国人男性Cが博物館と)

015 施：はい、えーと、こちらはですね、ジェイアール線か、横浜市営地下鉄、
それから、／／か、

016 C：　　ジェイアール線、そして、

017 施：はい、横浜市営地下鉄、

018 C：よこはま、しえい、ちかてつ、

019 施：東急東横線、

020 C：() とかー、とうきゅう、

021 施：東横線、

- 022 C : 東急東横線、
 023 施 : はい、それで桜木町駅下車ですー、
 024 C : //はい、そしてさくらー
 025 施 : そこから徒歩で、
 026 C : さーくーらーかーきょう、
 027 施 : さくらぎちょう、
 028 C : さくらぎー、きょう、
 029 施 : はい、

データ(3)では、外国人話者に案内係が問いかけているのだが、質問の意味がわかってもらえない。そこで、案内係は、さかのぼって自らの発話をくり返し、話を引き戻して、相手の反応に合わせる形で談話の流れを変えて repair を行っている。

(3) (ミャンマー人男性SWが美術館と)

- 066 施 : えー、こちらあの展覧会を2つ同時に開催するんですけどもー、
 067 S : はい、
 068 施 : えー、どういう展覧会をご覧に、なりたい、と思っていらっしゃいますでしょうか、
 069 S : あー、わたしですか？
 070 施 : はい、
 071 S : あの、学生ですけどもー、
 072 施 : えー、学生さん、え、企画展という展覧会とー、
 073 S : はい、
 074 施 : えー、こちらの常設展と、二つ行っているんですけども、
 075 S : はい、
 076 施 : 学生の方「かた」、企画の方「ほう」が、600円、

また、案内係が、先行する発話部分のくり返し（つまり旧情報のくり返し）をしながら、少しずつ新情報を相手に与えていくというパターンも見られた。一回の発話に、すべての情報を詰め込まずに、相手の反応をみながら（聞きながら？）情報を小出しにしている。（データ(4)(5)）

(4) (日本人女性Tが日本庭園と)

- 15 施 : その、ま横浜駅からー、バスが出ておりますの//でー、
 16 T : 横浜か//ら、
 17 施 : はい、
横浜駅ひ・が・し・ぐ・ちのー、
 18 T : (間) 東、
 19 施 : はい、
 20 T : (間) は//い、
 21 施 : 東口に・ば・ん・の・り・ば・から//ー、
 22 T : はい、
 23 施 : えー、横浜市営バスの8系統8番のバスかー、(間) あるいは125番のバスにお乗りいただいてー、

(5) (タイ人男性Aが、美術館と)

- 22 施 : えーそちらでよ・こ・は・ま・ほ・う・め・ん、
 23 A : 横浜方面、//はい、
 24 施 : はい、に乗っていただきますー、

25 A : はい、

26 施 : よ・こ・は・ま・の・つ・ぎ・の・え・き・の・一・さ・く・ら・ぎ・ちよ・
一という駅で降りていただきます//一、

4.3.2. 言い換え

言語形式をそのままなぞる反復に新たな要素が付加されると、くり返しは言い換えに近づく。機械的なくり返しに加えて、自分自身による表現の度合いが上がってくる。言い換えは「意味的なくり返し」semantic repetition と「言い換え」することもできる。表面的な言語形式は異なっても、表す意味は同等であり、言い換えは、くり返しの特殊なタイプであると位置付けられる。

言い換えは、日本人相手にも外国人相手にも出てくる。けれども、英語による言い換えは、後者の場合にしか見られなかった。

いろいろな表現が出てきたのは、やはり「その施設にはどうやって行きますか」への答えだった。説明する側の案内係は、まず相手がどこから来るのかを確かめる。そして、相手に合わせてルートを説明する。ルートによって発話が変わり、厳密な意味での比較はできなくなるが、それでも興味深い結果が現れた。

今回のデータでは、JR 京浜東北線沿線にある施設への問い合わせが偶然多くて、線名である「京浜東北線」と最寄り駅の名である「桜木町」という2つの固有名詞の出現頻度が高い。固有名詞は、語形を把握できないと理解したことにはならないため、言い換えというよりも、むしろくり返しの対象になると思われるが、FT には固有名詞の補足的な言い換えも見られた。(データ(6)(7))

(6) (ミャンマー人男性 SW が、美術館と)

021 施 : はい、えー、ジェイアール、

022 S : はい、

023 施 : 京浜東北線、

024 S : はい、

025 施 : というのがございまして、

026 S : はい、

027 施 : ブルーの電車なんですけれども一、

028 S : あ、ブルーですねー？

(7) (タイ人女性 S が博物館と)

23 施 : 電車で一、

24 S : (間) は一//い、

25 施 : えーつ、と、桜木町まで、

26 S : さくら//一、

27 施 : 来てください、

28 S : すみません、さくら一、何です//か一、

29 施 : さくら一ぎちよう、

30 S : ぎちよう、です//か一、

31 施：

はい、あの、横浜の、一つ先、が桜木町です、

今回の日本人協力者は全員横浜在住で、「京浜東北線」や「桜木町」等の名には馴染みがあり、一度耳にすれば、聞き取りには失敗していない。案内係は、電車名・駅名をくり返して発語すれば、相手の聞き取りエラーがあった場合でも、**repair** を達成できている。協力者に書いてもらったメモ（残念ながら、このメモは協力者全員から回収できたわけではない）にも、これらの固有名詞は正確に記入されていた。

それに対し、外国人協力者の方は、2名が東京在住、残りの24名が筑波大学の近辺に住む。そのため、これらの固有名詞にはあまり聞き覚えがなかったらしい。案内係に固有名詞を提示され、「はい」と理解(?)のサインを出していても、書いてもらったメモには、聞き取りエラーがいくつかある。桜木町(さくらぎちょう)が「さくらきちょう」となっていたり、根岸(ねぎし)が「ねんひき」、本牧(ほんもく)が「ほんもこ」、京浜東北線が「けひんとつふう」、日出町(ひのでちょう)が「きのうでんしょ」、八景島(はっけいじま)が「けっけいじま」となる。また、茨城県つくば市在住の留学生は、筑波か東京から行くという設定で問い合わせをしているため、遠くから横浜までやって来ると思われたらしい。そのためか、FTには、NTにはあまり見られない固有名詞の言い換え(?)がある。「京浜東北線」を「ブルーの、青色の(電車)」と説明したり、「桜木町」を「横浜から次の駅」と言う。確かに土地勘がなければ、このようなことはわからないかもしれない。

固有名詞に比べて、数詞の聞き取りエラーは少なかった。数詞を理解するためには、予備知識は特に必要とされず、日本語能力を除けば、日本人話者も外国人話者も同じ条件下にあると思われる。利用できる時間帯・使用料などの時間や金額などは、くり返される場合がほとんどで、言い換えはあまりない。FTでは、時間や金額もやはり言い換えの対象になっている場合(「10分」→「テン、ミニツ」など)もあった。

4.3.3.相手からの要求の有無：ターン取りとの関連

ところで、相手の発話を全く聞き取れなかった場合には、**repair** の要求が直接的な言語表現を通してなされることになる。それを受けて **repair** を実行に移す側も、相手の理解を助けるため、問題の箇所をくり返すのみならず、言い換えて、付加情報を提供している。聞き取りエラーへの **repair** は、相手にくり返して言うことで対処できるとしても、意味が理解できないことへの **repair** は、くり返しては不十分であるため、もう一步踏み込んで言い換えをすることで理解を促すということなのであろうか。

(8) (日本人女性Yが公園と)

- 59 施： それで一、あの一、キャンプの、設営はですね、持ち込みテントな
 んですけど一、
 60 Y： はい、
 61 施： ぜんぶ、あの一、60 張り「ぱり」なんです、許容がね？
 62 Y： (間)は？
 63 施： 60 張り「ぱり」を受付しているんですね？//一日当たり、
 64 Y： あ、そうなんですか、

(8)のYが書き取ったメモには、きちんと「張り」は記入されていた。けれども、「張り」というテントを数えるときの単位は、やはり聞き覚えがなければわかりにくいと思われる。

データ(9)(10)では、聞き手によるくり返し、言い換えに加えて、理解不足のために repair を請う直接的な言語表現が現れる。データ(9)の案内係は、「企画展」をくり返し、「マージ・コレクション展」を言い換えて説明する。固有名詞である「マージ・コレクション」は、SW にとっては初耳であり、すぐには理解できなかったようである。

(9) (ミャンマー人男性 SW が美術館と)

- 113 施： は、企画展のみとなります、
 114 S： きかくてんのみ？
 115 施： はい、マージ・コレクション展という展覧会を開催いたしますが一、
 116 S： あ一、まつりみたいですか一？
 117 施： はい？
 118 S： () それは、どんな意味ですか一？
 119 施： マージー、財団というパりに根拠地を持ちますマージ画廊の、え一、
作品をお借りして、企画展を行いますので、そちらの展覧会のみとそ
の期間はなりますが、

(10) (タイ人女性 S が博物館と) ((7)として既出)

- 23 施： 電車で一、
 24 S： (間)は一//い、
 25 施： え一つ、と、桜木町まで、
 26 S： さくら//一、
 27 施： 来てください、
 28 S： すません、さくら一、何です//か一、
 29 施： さくら一ぎちょう、
 30 S： ぎちょう、です//か一、
 31 施： はい、あの、横浜の、一つ先、が桜木町です、

漢字かな交じり方式による書き起こしでは、内容の表記が中心となるが、外国人話者が文法や発音上のエラーを起こしている場合にも、録音データをできるだけ忠実に再現するよう試みてみた。「自分は留学生である」旨の発言はともかく、外国人協力者の発話には、外国なまりの残る日本語が多い。書き起こしに十分な表示のできないのが残念であるが、日本語母語話者である分析者の直感では、複数の外国人話者から、日本語としてやや不自然であると思われるアクセントやイントネーションが聞き取れた。

この「不自然さ」が、日本語能力の不十分さの指標となり(実際、外国なまりがあるということは、日本語の音韻を母語話者並に習得できていないことになる)、意図的であるにし

ろないにしろ、日本人案内係からの repair を促すのではないかと考えたが、実際の反応はそうではなかった。特に相手がつまずかなければ、殊更に案内係の方から手を差し伸べるようなことはない。この点は、対日本人の反応と重なるものがある。

ただし、ここでポーズが問題となった。文化による違いは認めなければならないが、談話分析の研究は、一時に一人しか発言を許されないという大方の図式を明らかにしてきた。ターンの衝突を防ぐためには、話し手と聞き手との間に共有された原理がなくてはならない。ターン取りの原理も、談話構成能力の範疇に含まれてよいだろう。電話での問い合わせという設定では、なおさら然り。相手との社会的な共通項もパラ言語の手助けもなく、言葉を尽くした相互作用がすべてとなる。同時に双方が話しているのは、相手の言っていることが互いに聞き取れなくなる。

ところが、今回観察されたのは、ターンの衝突ではなく、話をしている2人の間でターンの宙に浮くという「お見合い」現象である。案内係が情報をくれた後に、それを受け取った側が黙り込んでしまう。(メモを取っている、ターンが自分に振り向けられているとは思っていない、何と言ってよいのかわからないなどの理由が推測される。) 結果として、情報を提示された後に問い合わせた側がターンを引受けないと、意図的であるか否かにかかわらず、案内係の発話が引き出される。引き出された発話は、言い換えやくり返しとなり、repair になる。データ(11)では、Tが黙り込む形で案内係からの repair を促しているのだが、どのような repair なのかが案内係に伝わらなかった。Tが聞き取れなかった部分は、「しょうがく」ではなくて、その前の「2400円」である。案内係から期待した応答が得られなかったTは、直接的な repair 要求に出る。データ(12)では、ポーズの後に、案内係が「土日(どにち)」を「土曜日曜日」と自分から言い換える。

(11) (日本人女性Tが遊園地と)

29 T: はい、それで、入園料は?どのくらい//でしょう、

30 施: 入園料無料でしてー、(間)

中の水族館の方ですと、大人高校性が2400円、(間) // しょうがく、

31 T: え?

(間)

32 施: // しょう、

33 T: 大人いくらですか?

34 施: 2400円です、

(12) (韓国人男性LJが遊園地と)

70 施: () 土日「どにち」が一、

(間)

71 施: 土曜日曜日が一、

72 L: あ、そー、とようび、とー、

73 施: はい、

5. 終わりに

今回は、電話での問い合わせという設定で対話のデータを収集した。Gass and Varonis (1985)⁴の方法論を参考にして、興味深い現象を観察することができた。けれども、データの性格や収集の方法論には、検討の余地が残されている。

日本人話者は積極的に問い合わせをしてくれたが、外国人話者の場合には、ただ依頼された通りの「質問」ととどまってしまった傾向がある。全員がそうであったのではないが、「質問」が情報要求行為にならなかったという印象を受けた。会話を録音できてはいても、録音終了後に尋ねると、自分の言われたことを理解して（聞き取れて）いなかった場合⁵がいくつかあった。けれども、理解不足がその修復となる repair につながらない。理由として、「問い合わせ」が厳密な意味で自発的になされたのではない⁶こと、相手に repair を促したくても、そのすべを知らなかったこと等が推測される。

外国人話者との対応に、「ことばの簡略化」である repair がより多く観察されるという仮説は、部分的にしか検証されなかった。スペース制約のために提示することはできなかったが、外国人相手であっても NT とさほど変わらぬ会話も少なくなかった。外国人話者に合わせて「簡略化」を行うか否かは、外国人側の日本語能力のみならず、日本人側の経験や意識に負うところも大きいと思われる。電話での問い合わせへの対応というデータの性格も要因の一つであろうか。

repair 以外の日本語 FT の特徴の分析も大変興味深く、社会言語的にも心理言語的にも示唆するところが大きい。しかし、背後に存在するであろう多くの要因の影響が予想されるため、考えられる要因をひとつひとつ吟味した上で、それぞれの有意義性を判定するという作業が必要になると思われる。

注

¹ Tarone(1980)も、コミュニケーション・ストラテジー、FT、repair を関連付ける。

² 対人心理の観点からレジスターの切替えを検討するアプローチとして、アコモデーション理論 speech/communication accommodation theory(Giles and Coupland, 1991)が挙げられる。

³ 電話先の施設名を記入してもらった後に、「その施設へはどうやって行きますか」「そこへ行くにはどのくらい時間がかかりますか」「利用できる時間はいつですか」「入場(入園)料はいくらですか」「休みの日はいつですか」を尋ねた。

⁴ Gass and Varonis (1985)は、初級・中級の外国人英語学習者 8 名(初級 4 名、中級 4 名)と英語母語話者 2 名の計 10 名の協力者に、電話帳から無作為に選んだ番号へ電話をかけてもらっている。会話の名目は、食生活についての電話調査というものであったが、電話口にてた人への質問は、あらかじめ定められたも

のを読み上げるというものであった。一方、今回の調査では、スクリプトを指定せず、問い合わせる内容のみを大まかに指示した。

⁵ この点に関しては、Gass and Varonis(1985)にも言及がある。

⁶ 協力者からの問いかけは、分析者が渡したメモ用紙の文面に左右されてしまった節がある。特に、日本人も外国人も同様に、「その施設にはどうやって行きますか」という質問文を、読み上げてしまったようであった。

参 照 文 献

- 伊藤博子 1991 「対談番組における repair」 『日本語学』 10-6 : 62-74
- 尾崎明人 1993 「接触場面の訂正ストラテジー — 「聞き返し」の発話交換をめぐって—」 『日本語教育』 81 : 19-30
- 中田智子 1991 「会話にあらわれるくり返しの発話」 『日本語学』 10-10 : 52-62
- 山崎真稔、高橋貞雄、佐藤久美子、日野信行訳 1988 『ロングマン応用言語学用語辞典』 南雲堂
- Bialystok, Ellen 1990 *Communication Strategies: A Psychological Analysis of Second-Language Use*. Oxford: Blackwell
- Canale, Merrill and Michael Swain 1980 "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing" *Applied Linguistics* 1-1 : 1-47
- Ferguson, Charles A. 1971 "Absence of copula and the notion of simplicity: a study of normal speech, baby talk, foreigner talk and pidgins." In : Dell Hymes (ed.) *Pidginization and Creolization of Languages*, 141-150 Cambridge: Cambridge University Press
- 1981 "'Foreigner Talk' as the name of a simplified register" *International Journal of the Sociology of Language* 28 : 9-18
- Freed, Barbara 1981 "Foreigner talk, baby talk, native talk" *International Journal of the Sociology of Language* 28 : 19-39
- Gass, Susan and Evangeline M. Varonis 1985 "Variation in native speaker speech modification to non-native speakers" *Studies in Second Language Acquisition* 7-1 : 37-57
- Giles, Howard and Nikolas Coupland 1981 *Contexts of Accommodation*. Oxford: Oxford University Press
- Long, Michael H. 1983 "Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers" *Studies in Second Language Acquisition* 5-2 : 177-193
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson and Harvey Sacks 1977 "The preference for self-correction in the organization of repair" *Language* 53-2 : 361-382
- Tarone, Elaine 1980 "Communication strategies, foreigner talk, and repair in interlanguage" *Language Learning* 30 : 417-431
- Valdman, A. 1981 "Sociolinguistic aspects of foreigner talk" *International Journal of the Sociology*

【付録：調査協力への依頼状】

調査協力へのお願い

94/10/12

筑波大学大学院文芸・言語研究科（応用言語学） 永山友子

前略

早くも10月も半ばとなり、秋の色合いが濃くなって来ました。蒸し暑さと涼しさがバトタッチをしているようです。皆様には、いかがお過ごしでしょうか。

お忙しいところ誠に恐縮でございますが、皆様にお願いがございます。私は筑波大学大学院文芸言語研究科に在籍する大学院生です。現在言語行動研究の一環として、問い合わせに対しての「応答」を調査しています。一般からの問い合わせに対して、公共（または、半公共）施設の案内係がどのように対応しているかを調べているのです。分析対象として、電話での問い合わせ、そして、その問い合わせへの応答を録音して、データにします。本調査の趣旨を理解していただけたら、皆様にデータ収集への御協力をお願いしたいのです。

下記の施設などの中から2つ選んで、問い合わせの電話をかけていただきたいと考えております。ピックアップというアダプターを電話機に取り付けて、テープ・レコーダーにつなぐと、電話での会話を録音することができます。ピックアップ・アダプターは、お貸しします。もし、皆様が留守番電話をお持ちでしたら、電話機には、電話での会話を録音する機能が付いていると思います。その機能を使っても構いません。録音には、この手紙と一緒にお渡ししたテープを使ってください。録音済みのテープを返していただくときに、調査協力へのお礼として500円分のテレフォンカードをお渡しします。

問い合わせの対象には、なるべく、知らないところ・行ったところのないところを選んでいただけたらと考えています。

問い合わせさせていただく内容は、①その施設への生き方（どの電車・バスに乗るか）、②そこへ行くのに、どのくらいの時間がかかるか、③利用できる時間、④入園（入場）料、⑤休みの日などです。録音したテープをお返しくださる時に、聞き取った内容の簡単なメモを添えていただければ、うれしく思います。このメモは日本語でなくても構いません。

今回の調査の結果は、ゼミのレポート・論文としてまとめる予定ですが、得られたデータを調査以外の目的に使用することはありません。なお、結果報告の中で、皆様の個人的な情報を公表しないことも付け加えさせていただきます。もし、何かご質問がありましたら、私までご連絡ください。どうぞよろしく願いいたします。